

# 言語事実と論理（二） ——『哲学的考察』を読む——

川崎 誠\*

## 一 『哲学的考察』 I 読解（続）

前稿に続き、ウィトゲンシュタイン『哲学的考察』を読み解く。使用テキストは前稿に記した。

### （7）『哲学的考察』 7 節

1 パラグラフ：「文法は『論理的なタイプ理論』である。Die Grammatik ist eine 'theory of logical types'.」例えば「スプーン」と「スプーンの集合」とはタイプを異にするというのが「タイプ理論」<sup>(1)</sup>だが、これに準えて「論理的なタイプ理論」が謂われる。『講義』の次の叙述を参照する。

<講> 或る講演の席で、たびたび *Messieurs!* という語を連発するのを聞いた場合、そのつどそれは同じ表現であるとの感じをもちはするものの、言い場所によって口調の違いや抑揚のために、はなはだしい音的差異が現われる——そのはなはだしさは、ほかの場合ならば別の語を区別させるほどである（参照、*pomme* と *paume*, *goutte* と *je goûte*, *fuir* と *fuir*, etc.）；(p. 151)

---

\*専修大学経営学部教授

「はなはだしい音的差異」である個々の *Messieurs!* が、しかしここでは「同じ表現」と解される。つまり「個々の *Messieurs!*：要素」・「同じ表現の *Messieurs!*：集合」である。そこで再び廣松渉の挙げる例に目を向けよう。赤ん坊の映る1枚の写真を見て、「これは福田赳夫だ」と信ずるゆえんを廣松は次のように説く。

嬰兒期の福田、少年期の福田、老年期の福田を通じてまさにそれを同一人物と認定させるだけの共通の特質なるものを、比較校合という手続で取出すことは恐らく不可能な筈である（福田赳夫伝の第二頁に出て来る赤ん坊を「これは福田だ」と認知するのは、老福田と類似の面影を看取するからではない。類似性を根拠にして福田と呼ぶのであれば、——嬰兒福田と老人福田との面影上の類似度に比べて、はるかに——類似の度合いが強い人物は幾らでも居るのであるから、それらの人物をことごとく福田と呼ぶべきことになってしまう）。私の直接的な認知に即するかぎり、およそ類似していても、世人が——一定の根拠をもって——赤ん坊の姿で写っている人物と老人の姿で写っている人物とを同一の「福田赳夫」と呼ぶことに追随して、これらおよそ別物にしか思えないものを、私も同じ「福田」と呼ぶだけの話である。（『もの・こと・ことば』 p.152）

「私の直接的な認知に即するかぎり、およそ類似していない」にもかかわらず、「世人」に「追随して同じ『福田』と呼ぶ」、その廣松と同様に、講演の聴衆は自らの直接的な認知に即するかぎり、「はなはだしい音的差異が現われる」にもかかわらず、「他人と同じように言語を使用する」のである。

『考察』7節に対応する『大論理学』は次である（A存在 1パラグラフ 第7文）。

<大> 存在のうちにはまた同じく思考すべき何ものもない、換言すれば、存在は同様にこの空虚な思考作用にすぎない。Es ist ebensowenig etwas in ihm zu denken, oder es ist ebenso nur dies leere Denken.

ここで「存在」とは前文で「純粋な・空虚な直観作用そのものにすぎない」とされた「存在」であり、廣松や聴衆の「直接的な認知」である。その「直接的な認知」に即するかぎり、「はなはだしい音的差異が現われる」にもかかわらず、「他人と同じように言語を使用する」のは、「存在のうちにはまた同じく思考すべき何ものもない、換言すれば、存在は〔直観作用と〕同様にこの空虚な思考作用にすぎない」からである。

2 パラグラフ：「叙述されたことを記述し、そして叙述が適切であることを示す諸命題、これらの諸命題によって正当化されるべき叙述のその規則を、私は如何なる約定とも呼ばない。Ich nenne *die* Regel der Darstellung keine Konvention, die sich durch Sätze rechtfertigen läßt, Sätze, welche das Dargestellte beschreiben und zeigen, daß die Darstellung adäquat ist. 文法の約定は、叙述されたことの記述によって正当化されるものではない。Die Konventionen der Grammatik lassen sich nicht durch eine Beschreibung des Dargestellten rechtfertigen. かかる記述のいずれもが文法の規則をすでに前提している。Jede solche Beschreibung setzt schon die Regeln der Grammatik voraus. すなわち、正当化されるべき文法においてナンセンスとみなされることは、正当化する諸命題の文法においても意義があるとみなされることはありえない。D.h., was in der zu rechtfertigenden Grammatik als Unsinn gilt, kann in der Grammatik der rechtfertigenden Sätze auch nicht als Sinn gelten, u.u.」〔約定 Konvention〕(仏語 'convention') について、『講義』に次の使用例がある。

<講> 一社会に受け入れられた表現手段はすべて、原則として集団の習慣あるいは、同じことになるが、制約に基づいているのである。Tout moyen d'expression reçu dans une société repose en principe sur une habitude collective ou, ce qui revient au même, sur la convention. (p. 98)

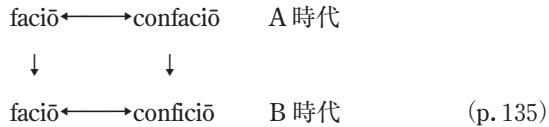
すると連発される *Messieurs!* を「同じ表現である」と受け入れるのも「約定（制約）」に基づいてのことである。その上でさらに次の言語事実も挙げられる。

<講> 初頭的でない開音節におけるラテン語の短音 a は、i に変じた：*faciō* とならんで *conficiō* があり、*amīcus* とならんで *inimīcus* がある、というふうに。人はしばしばこの法則を次のようにも言い表わす：*faciō* の a は *conficiō* では i となる、なぜならそれはもう第一音節にないからである、と。これは精密でない。(p. 135)

この例で「叙述されたこと」は「*faciō* とならんで *conficiō* があり、*amīcus* とならんで *inimīcus* がある」(*faciō - conficiō · amīcus - inimīcus*) であり、それを「記述し、そして叙述が適切であることを示す諸命題」は「初頭的でない開音節におけるラテン語の短音 a は、i に変じた」である。さらに「これらの諸命題によって正当化されるべき叙述のその規則（法則 loi）」が、「*faciō* の a は *conficiō* では i となる devient, なぜならそれはもう第一音節にないからである」、これである。つまり人の「言い表わし dire」は「約定（集団的習慣）」である——「人がしばしば souvent 言い表わす」すなわち「一社会が受け入れる」——。しかし「これは精密 exact でない」。ゆえに「私は如何なる約定とも呼ばない」。

『講義』は続けて説く。

<講> いまだかつて *faciō* の a が *conficiō* において i と「なった」ためしはない。真理を建て直すには、二つの時代と四つの辞項を識別せねばならない：人は最初 *faciō* - *confaciō* と言った；次いで *confaciō* が *conficiō* と変容し、*faciō* のほうは変化を受けず存続したので、*faciō* - *conficiō* と言ったのだ、つまり：



つまり *faciō* - *confaciō* の共時論的事実は先の「規則」を否定する - 「*faciō* の a が *conficiō* において i と『なった *devenu*』ためしはない」——。つまり「文法の約定（集团的習慣）は、叙述されたことの記述——「初頭的でない開音節におけるラテン語の短音 a は、i に変じた」——によって正当化されうるものではない」——「真理を建て直すには、二つの時代と四つの辞項を識別せねばならない」が、にもかかわらず「叙述されたことの記述」は一つの時代（B 時代）の内にいる——。

さて『講義』はさらに

<講> これらの対立 (*faciō* - *conficiō*) もまた、音韻進化 (*confaciō* → *conficiō*) の偶生的結果でありながら、しかも共時論的秩序において本質的な文法現象を組み立てずにはおかない。(同)

と説く。そしてこれは *faciō* - *conficiō* が「一社会に受け入れられた表現手段」だということと変わらない。したがって「かかる記述——「初頭的でない開音節におけるラテン語の短音 a は、i に変じた」——のいずれもが（一社会に受け入れられた）文法の規則——すなわち *faciō* - *conficiō* の「対立」。

先の「その規則」ではない——をすでに前提している」。[*faciō* の a が *conficiō* において i と『なった *devenu*』] ので「対立」が生じたのではないのである。

そこで第4文だが、「was」は「*faciō* の a は *conficiō* では i となる、なぜならそれはもう第一音節にないからである」、これである。だがこれは「精密でない」のだから、「正当化されるべき（B時代の）文法においてナンセンスとみなされる」。次に「正当化する諸命題」（適切であることを示す諸命題）は「初頭的でない開音節におけるラテン語の短音 a は、i に変じた」だが、これは「文法の規則（*faciō* - *conficiō*）をすでに前提している」にすぎず、「意義があるとみなされることはありえない」。結局「正当化されるべき文法においてナンセンスとみなされることは、（誤って）正当化する（と考えられている）諸命題の文法においても意義があるとみなされることはありえない」。

3 パラグラフ：「言語を以てしては明証の可能性を踏み越えることはできない。Man kann nicht die Möglichkeit der Evidenz mit der Sprache überschreiten.」 関連する叙述を『講義』に求める。

<講> 人はややもすれば、それ（*faciō* と *conficiō* とのあいだの純然たる共時論的対立）は事実ではなくて結果であると言う。しかしながらそれは結構その秩序〔共時態〕における〔言語〕事実であって、およそ共時的現象はすべてこの性質のものである。（p. 135）

「結構〔まさに〕その秩序における事実 *bien un fait dans son ordre*」は「明証」である。だがなぜ「明証の可能性」なのか。『講義』の次の叙述が参考になる。

<講> 通時論的事実はそれ自体のうちに存在理由をもつ事件であっ

て、それから生じうる個々の共時論的帰結は、それとは全然無関係のもの *complètement étrangères* である。(p.119)

より具体的には次のように説かれる。

<講> [類推的] 創造が現われた瞬間にはじめて産出過程が生じると思うのは誤りである；その要素はとうに与えられている。私がいま *in-décor-able* のような語をこの場で作ったとすれば、それはすでに言語のなかに陰然と存在するのである；そのすべて要素は、*décor-er*, *décor-ation*；*pardonn-able*, *mani-able*；*in-connu*, *in-sensé*, etc. のような統合のなかに見出される；そしてその言のなかにおける実現は、それを形成する可能性に比べれば、取るにたらぬ事実である。(p.231)

「それ (*in-décor-able*) の言のなかにおける実現が、それを形成する可能性 *la possibilité de le former* に比べれば、取るにたらぬ事実である」のなら、ましてやそれが「一社会に受け入れられる」ことは可能的であるにすぎない。そして「明証」すなわち「その [共時論的] 秩序における事実」なのだから、「言語を以てしては明証の可能性を踏み越えることはできない」。

4 パラグラフ：「これらの物の説明が可能ということは、つねに、他人も私と同じように言語を使用する、ということに基づいている。Die Möglichkeit der Erklärung dieser Dinge beruht immer darauf, daß der andere die Sprache so gebraucht wie ich. もし他人が、私にとっては意義を有しない語の並びが彼にとっては意義がある、と主張するとき、私は、彼がここで私と異なった意味で語を使用しているのか、あるいは没思想的に話しているかのいずれかである、と想定することしかできない。Behauptet er, daß der eine Zusammenstellung von Wörtern für ihn Sinn hat, die für

mich keine besitzt, so kann ich nur annehmen, daß er die Wörter hier in anderer Bedeutung gebraucht als ich oder gedankenlos redet.」 「他人も私と同じように言語を使用する」とは、その言語が「一社会に受け入れられている」ということである。「もし他人が、私にとっては意義を有しない語の並びが彼にとっては意義がある、と主張する」なら、彼が私と同じ「社会」にいるとは言えない。私が電車内で目撃した言語事実を例に採ろう。

電車内で三歳ぐらいの女児が母親とじゃんけんをしている。子供は自分が勝つと機嫌がよいから、母親はわざと負けているのかもしれない。そのうち母親が「私負けましたわ」と言った。娘はその言い方が気に入ったのか、「私勝ちましたわ」と返す。また、じゃんけんぽん。娘の勝ち。母親「私負けましたわ」娘「私勝ちましたわ」数回繰り返した後、母親が娘に言った、「ふみちゃん、『私負けましたわ』は上から読んででも下から読んででも『わたし負けましたわ』なんだよ。」しかしおそらくはまだ文字を知らない幼児のこと、無邪気に「私勝ちましたわ」と続けるうちに、私の下車駅に電車が着いた。

厳密に言えば、回文を理解できない娘は母親とは別の「社会」（言語共同体）の住人である。

### (8) 『哲学的考察』 8 節

1 パラグラフ：「次のように言うことは意味をもつと誰か信じられるか：『それは轟音ではなくて色である』。Kann jemand glauben, es habe Sinn zu sagen : ‘Das ist kein Lärm, sondern eine Farbe?’」 一般に「音ではなくて色である」とは言わない。だから答えは「意義をもつとは信じられない」であり、「それは轟音ではなく色である」は ‘sinnlos’ である。



これは前節「没思想的に話す」を承けて謂われており、つまり ‘gedankenlos’ ゆえに ‘sinnlos’ なのである。

2 パラグラフ：「他方人はもちろん次のように言うことができる：『私をいらいらさせるのは轟音ではなくて色である』、ここでは或る変項が色と轟音をその値として受け入れるかのように映現することができよう。Andererseits kann man freilich sagen : ‘Was mich nervös macht, ist nicht der Lärm, sondern die Farbe’, und hier könnte es scheinen, als ob eine Variable eine Farbe und einen Lärm als Werte annähme. (「音や色は言語的な表現手段として役立つ。Laute und Farben können als sprachliche Ausdrucksmittel dienen.」) 先の命題が次の種類のものであることは明らかだ：『銃声を聞くか僕が合図するのを見たら、逃げ出せ。』Es ist klar, daß jener Satz von der Art ist : ‘Wenn du einen Schuß hörst oder mich winken siehst, laufe davon.’ というのは、音声言語や身振り言語の機能がそれに基づいているところの合意はこの種のものであるから。Denn dieser Art ist die Vereinbarung, auf der die Funktion der gehörten oder gesehenen Sprache beruht.」はじめに『講義』から次の例を引く。

<講> *roi* を、18世紀末には *rwè* と発音したことは、次のような逸話によって文証される…… (中略) ……：革命政府の裁判所で、一人の婦人が訊問をうけた、王様が必要だ、と証人の前で口走ったことはないかというのである；婦人は答えて、「カペーであれ誰であれ、*roi* の話などした覚えはない、あの糸紡ぎの道具 *rouet maître* (紡車) の話をしたまでだ」と言った。(p. 55)

婦人が「私が話したのは王様ではなくて紡車である」と言うとき、「ここでは或る変項が王様と紡車をその値として受け入れるかのように映現する」。つまり「話を聞くか手紙を読んだら、逃げ出せ」というように、「言

語と書 *langue et écriture*」(p.40)とは「言語的な表現手段として役立つ」のである。これは「音声言語や身振り言語の機能がそれに基づいているところの合意は(「AはBである」, とりわけ「書かれた語は話された語である」という)この種のものであるから」である。

対応する『大論理学』は次である (A存在 1パラグラフ 第8文)。

<大> 存在というこの無規定的な直接的なものは実際に無であり、無以上でも無以下でもない。Das Sein, das unbestimmte Unmittelbare ist in der Tat *Nichts* und nicht mehr noch weniger als *Nichts*.

本文は“Das Sein ist *Nichts*.”であり、つまり「存在(有)は無である」というのだから、ここでも「或る変項が『存在』と『無』をその値として受け入れるかのように映現している」だろう。

### (9) 『哲学的考察』 9節

9節は「一」の最後だが、『考察』の区切りと『大論理学』のそれとは必ずしも一致せず、対応する『大論理学』の叙述は「B無」の最初の文(1パラグラフ 第1文)である。

<大> 無・純粹無。 *Nichts, das reine Nichts*.

そして「純粹」とは

<大> 本質はまずはじめにはそれ自身のなかで・自分の単一な同一性のなかで映現する；こうして本質は抽象的反省・無から無を通じて自己自身へともどる純粹な運動である。[つぎに] 本質は現象する、そうするといまや本質は、映現の諸契機が現実存在をもっているから、実在

的な映現である [ことになる]。

という使用例があるように、「実在性 Realität」に対するところの・他者の契機の捨象された「抽象性 Abstraktion」である。あるいは「実在性」に関わって

<大> 即自存在 das Ansichsein だけが、または向他存在 das Seinfür-Anderes だけが現存している場合には、これらの規定のおのおのはそれだけ切りはなせば für sich 一面的であり、実在性はこれらの両者を必要とする総体性 Totalität であるという理由によって、実在性が欠けていることに気づくのである。(Das Sein S. 71)

と説かれることを踏まえれば、「純粹」は「一面的 einseitig」の謂いである。

『考察』である：「哲学者たちはこれまでたえずナンセンスを論じてきたのか、という問いに対しては次のように答えられよう：そうではない、彼らは一つの語をまったく差異された諸々の意味で使用していることに気づいていないだけである。Auf die Frage, ob die Philosophen bisher immer Unsinn geredet haben, könnte man antworten : nein, sie haben nur nicht gemerkt, daß sie ein Wort in ganz verschiedenen Bedeutungen gebrauchen. この意味で、或るものが他のものとぴったり同じだと言うことは無制約にナンセンス、というわけではない、というのは、確信をもってそのことを言う人は、その瞬間に『同じ』という語で何か(ひょっとして『偉大な』)を言わんとしているからである、しかし彼はその際にこの語が  $2 + 2 = 4$  の場合とは異なった意味で使用されていることを知らないのである。In diesem Sinne ist es nicht unbedingt Unsinn zu sagen, ein Ding sei so identisch wie das andere, denn wer das mit Überzeugung sagt, meint in die-

sem Augenblick etwas mit dem Wort 'identisch' (vielleicht 'groß'), aber er weiß nicht, daß er hier das Wort in anderer Bedeutung gebraucht als es in  $2+2=4$  gebraucht ist.」 「ナンセンス Unsinn」は前節 'sinnlos' を承けての言及だが、哲学者についてはむしろその「一面性」が指摘される。先に挙げたフランス語 'roi' が第2文の例になる。すなわち—「或るもの (rwè) が他のもの (rwè) とぴったり同じだと言うことは無制約にナンセンス、というわけではない。「婦人」が「rwè」を連発するのを聞いた「証人」は、「そのつどそれは同じ表現である (ぴったり同じだ)」と感じ、「確信をもってそのことを言う」—彼は「その瞬間に『同じ』という語で何か (ひょっとして『偉大な』) を言わんとしている」。だがなぜ 'groß' (仏語訳 grand) なのか、ウイトゲンシュタインは特に理由を述べない。本稿は次のように解する。Capet は1792年君主制を放棄した後の Loui XVI の名であり、その二代前 Loui XIV が「大王 le Grand」と呼ばれた。つまり、婦人の連発する「rwè」は「grand」にほかならないと「証人」は考えた—。「しかし彼はその際にこの語 (rwè) が *roi* とは異なった意味で使用されていることを知らないのである」—「カペーであれ誰 [le Grand] であれ、*roi* の話などした覚えはない」—。無論これは婦人の機転である。

## 二 『哲学的考察』 II 読解

### (10) 『哲学的考察』 10節

『考察』は本節から II に入る。1パラグラフ：「モデルを形成するための指図書だと諸命題 [文] を解するならば、命題の形象性はいっそうはつきりするだろう。Wenn man die Sätze als Vorschriften auffaßt, um Modelle zu bilden, wird ihre Bildhaftigkeit noch deutlicher.」この叙述を「書 l'écriture」に関する『講義』の一節と対比する。

<講> [書による言語の表記の] 一つの結果は、書がその表記すべきものを表記しなければいけないだけ、それを基礎にしようとする傾向が強まることである；文法学者は書かれた形態にばかり注意を払って余念がない。…… (中略) ……「発音する」とか「発音法」とかいう語の用い方は、そうした思いちがいの承認であって、書と言語とのあいだにある正当・真実の関係を裏返しにするものである。或る字はかようかよう発音すべきであるというとき、人は映像を本体と見なすのだ。Quand on dit qu'il faut prononcer une lettre de telle ou telle façon, on prend l'image pour le modèle. (p.47)

'Modell' : 'modèle' という語の一致, 'etw als etw auffassen' : 'prendre qc pour qc' という構文の対応, これらは容易に把握される。したがって「人が映像をモデルと見なす」ように「人は諸命題を指図書と解する」のである。「映像 image ; Bild」が「話された語 le mot parlé」でなく「書かれた語 le mot écrit」であること (p.40), 「モデルを形成するための指図書」というのだから, 「指図書」そのもの ('Vor-schrift>vor-schreiben' : 「モデルとして書かれたもの」) が「モデル」だということを思い合わせてもよい。つまり『考察』と『講義』とのあいだには径庭がない。実際「或る字はかようかよう発音すべきである il faut prononcer」というとき, 「書かれた命題」(或る字) は「指図書」であり「基礎 base」である。そして「書かれた形態 la forme écrite」において「命題の形象性 Bildhaftigkeit のいっそうははっきりするだろう」ことは言うまでもない。だがこれは——哲学者が一面的であったと同じく——「文法学者」の「思いちがい (悪弊 abus)」である。

2 パラグラフは「思いちがい」のゆえんを説く：「というのは、語が私の手を導くことができるために、それは望まれた活動の多様性をもたねば

ならないから。Denn, damit das Wort meine Hand lenken kann, *muß* es die Mannigfaltigkeit der gewünschten Tätigkeit haben.」 「語が私の手を導く [指図する] というのだから、ここでも問題は「書かれた語」である。そしてその「書かれた語」のもつ「望まれた活動の多様性」については、『講義』が次の例を挙げている。「書法と発音の食い違いの原因 causes du désaccord entre la graphie et la prononciation」(p. 43) を説く一節である。

<講> 言語は間断なく進化するが、書は不動になりがちである。その結果、書法はその表記すべきものに対応しなくなる。或る時代にはつじつまの合った記写法も、一世紀もたてば不合理になる。或る時期のあいだは、発音の変化に調子をを合わせて書写記号を変えてはみるが、とど断念してしまう。フランス語で *oi* に対して生じたのがそれである。

こう発音した：      こう書いた：

11世紀には…… 1.	<i>rei, lei</i>	<i>rei, lei</i>
13世紀には…… 2.	<i>roi, loi</i>	<i>roi, loi</i>
14世紀には…… 3.	<i>roè, loè</i>	<i>roi, loi</i>
19世紀には…… 4.	<i>rwa, lwa</i>	<i>roi, loi</i>

11世紀および13世紀には、「[書かれた] 語の望まれた活動」はまさに「語のなかに継起する音のつながりを再現する」(p. 42) ことであった。だから11世紀には話された語 *rei* を書かれた語 *rei* が再現し、13世紀には *roi* を *roi* が再現した。*rei* を再現し *roi* を再現するのであるから「望まれた活動の多様性」である。しかし14世紀以降になると、「言語の統一をなすのに音声よりも適している」(p. 41) との考えから、「[書かれた] 語の望まれた活動」はそうした「言語の統一」を示すことであった。だから14世紀の *roè* も19世紀の *rwa* も *roi* と書かれた (一貫した *roi*)。 *roi* は *roè* の書写記号でありまた *rwa* の書写記号でもあるのだから、ここでも「望まれ

た活動の多様性」である。「語が私の手を導くことができるために、それは望まれた活動の多様性をもつ」とはこれである。—後述との関連で付記しておく。「11世紀には話された語 *rei* を書かれた語 *rei* が再現し、13世紀には *roi* を *roi* が再現した」、これを「肯定的な命題」に書き直して「(11世紀に) 書かれた語は話された語である」・「(13世紀に) 書かれた語は話された語である」を得る。また「14世紀の *roè* も19世紀の *rwa* も *roi* と書かれた」、これも「肯定的な命題」に書き直して「(14世紀に) 書かれた語は話された語である」・「(19世紀に) 書かれた語は話された語である」を得る。すると前二者は真であることで「書かれた語が継起する音のつながりを再現する」ことを謂い、後二者は偽であることで「書かれた語が言語の統一を示す」ことを謂うだろう—。

3 パラグラフ：「そしてこのことは否定的な命題の本質をも説明しなければならない。Und das muß auch das Wesen des negativen Satzes erklären. 例えば『その本は赤くない』という命題の理解を、モデル作成に際し赤色を捨て去ることにより、示すことができるだろう。So könnte einer zum Beispiel das Verständnis des Satzes ‘Das Buch ist nicht rot’ dadurch zeigen, daß er bei der Anfertigung eines Modells die rote Farbe wegwirft.」同じ例を採る。

11世紀に話された語 *rei* は *rei* と書かれた。

[書かれた語は話された語である。]

13世紀に話された語 *roi* は *roi* と書かれた。

[書かれた語は話された語である。]

14世紀に話された語 *roè* は *roi* と書かれた。

[書かれた語は話された語でない。]

19世紀に話された語 *rwa* は *roi* と書かれた。

[書かれた語は話された語でない。]

すると後二者は「否定的な命題」だが、「その理解を、モデル(命題)作

成に際し話された語を捨て去ることにより、示することができるだろう」——「話された語を捨て去る」ことすなわち書かれた語は「言語の統一をなすのに音声よりも適している」との考えである——。

4 パラグラフ：「これらのことが、否定的な命題は否定される命題の多様性をもち、否定される命題に代わって真となりうる<sup>そうした</sup>諸命題の多様性をもつのではない、ということをも示すだろう。Das und Ähnliches würde auch zeigen, wie der negative Satz die Mannigfaltigkeit des verneinten Satzes hat und nicht *der* Sätze, die etwa an dessen Statt wahr sein könnten.」時代が移りゆき、「(11世紀に)書かれた語は話された語である」・「(13世紀に)書かれた語は話された語である」だったのが、「(14世紀に)書かれた語は話された語でない」・「(19世紀に)書かれた語は話された語でない」になる。その場合、否定的な命題は「書かれた語が言語の統一を示す」という「語の望まれた活動の多様性」をもちはするが、しかし「語のなかに継起する音のつながりを再現する」ことはない。だから「否定的な命題」は「否定される命題に代わって真となりうる<sup>そうした</sup>(独自の)諸命題の多様性をもつ」かに見える。だが実はそうでない。「(11世紀に)書かれた語は話された語である」と「(13世紀に)書かれた語は話された語である」を否定する「否定的命題」を作り——「(11世紀に)書かれた語は話された語でない」「(13世紀に)書かれた語は話された語である」——、「(14世紀に)書かれた語は話された語でない」「(19世紀に)書かれた語は話された語でない」とともに並べてみる。

- i (11世紀に)書かれた語は話された語でない。
- ii (13世紀に)書かれた語は話された語である。
- iii (14世紀に)書かれた語は話された語でない。
- iv (19世紀に)書かれた語は話された語でない。

この四つの否定的な命題のうち、i と ii は偽であることで「書かれた語が継起する音のつながりを再現する」ことを謂い、iii と iv は真であること



で「書かれた語が言語の統一を示す」ことを謂う。そうであれば「否定的な命題は否定される命題の多様性をもつ」であろう。

そこで『大論理学』である (B 無 1 パラグラフ 第 2 文)。

〈大〉 それは自己自身との単一な相等性であり、完全に空虚であること、規定や内容の欠如していることである。es ist einfache Gleichheit mit sich selbst, vollkommene Leerheit, Bestimmungs- und Inhaltslosigkeit ;

「それ」は「無・純粹無」を承けるが、『考察』に即しては「否定的な命題」である。その「否定的な命題は否定される命題の多様性をもち、否定される命題に代わって真となりうるそうした命題の多様性をもつのではない」のだから、「それ [否定的な命題] は自己自身 [否定される命題] との単一な相等性であり——すなわち「否定される命題の多様性をもつ」——、完全に空虚であること、規定や内容の欠如していること——すなわち「否定される命題に代わって真となりうるそうした (独自の) 命題の多様性をもつのではない」——である」。

#### (11) 『哲学的考察』11節

1 パラグラフ：「『なるほど私は赤を見ていないが、絵具箱が与えられれば、そのなかに赤を示すことができる』と言うことは何を意味するか。Was heißt es, zu sagen ‘ich sehe zwar kein Rot, aber wenn du mir einen Farbenkasten gibst, so kann ich es dir darin zeigen’? ……のときそれを示すことができることを、人は如何にして知ることができるか。Wie kann man wissen, daß man es zeigen kann wenn … ; それゆえ、それを見て認識することができることを。daß man es also erkennen kann, wenn man es sieht?’ 『講義』は「書の証言の批判」と題する節で次のように謂う。

＜講＞ 過去に属する言語の場合には、結局間接所与に向かわざるをえない。そのときには音声体系を立てるために利用すべき資材は何であるか？ (p. 53)

なるほど人は「過去に属する言語」を聞いていないが、「音声体系を立てるために利用すべき資材」(書)が与えられれば、そのなかに「過去に属する言語」を示すことができる、という次第。そして「……のときそれを示すことができることを、人は如何にして知ることができるか」なる問いに対応して、では「音声体系を立てるために利用すべき資材 ressourceは何であるか」が問われる。

2 パラグラフ：「ここで私念されていることは次の二種類でありえよう：[一つは、] 予想が言い表わされており、そこでそれが示されれば、頭に一撃を受けると頭痛に襲われるということが予想されるという意味で、私はそれを認識するであろう Was hier gemeint ist, könnte zweierlei Art sein : Es könnte die Erwartung ausgesprochen sein, daß ich es erkennen werde, wenn es mir gezeigt wird, in dem Sinne, wie ich erwarte Kopfschmerzen zu bekommen, wenn ich einen Schlag auf den Kopf erhalte ; するとこれは、物理的な出来事の実現に関係するすべての予想と同じ基底をもつ、いわば物理学的な予想である。Das ist dann sozusagen eine physikalische Erwartung, mit derselben Basis, wie alle Erwartungen, die sich auf das Eintreffen physikalischer Ereignisse beziehen. —あるいはしかし、問題は物理的な出来事の予想ではまったくなく、それゆえその出来事のあるかもしれぬ未発によっても私の命題は論破されえない。Oder aber es handelt sich gar nicht um die Erwartung eines physikalischen Ereignisses, und daher kann auch mein Satz durch das eventuelle Ausbleiben dieses Ereignisses nicht falsifiziert werden. そうではなくて、この命

題はいわば次のことを言っている、すなわちそれを以てつねに色を比較することができるであろう原像を私はもっている（そしてこの可能性は論理的な可能性である）。Sondern der Satz sagt gleichsam, daß ich ein Urbild besitze, mit dem ich die Farbe jederzeit vergleichen könnte (und diese Möglichkeit ist eine logische Möglichkeit).」 「音声体系を立てるために利用すべき資材は何であるか」の問いの答えとして、『講義』も「二種類」を挙げる。すなわち「外的指標 les indices externes」(p. 53) と「内的指標 les indices internes」(p. 54) である。「物理学的な予想」に対当する前者は

＜講＞ なかんずく、その時代の音および発音を記述した同時代人の証言である。(p. 53)

から、いわば「予想が（証言として）言い表わされており、そこでそれが（証言によって）示されれば、私はそれを認識するであろう」。後者について『講義』は次を説く。

＜講＞ 或る文字の価値を決定しようとするときは、それが表記する音が前の時代において何であったかを知ることが、すこぶる肝要である。その現在の価値は進化の結果であって、これによって或る種の仮説はぞうさなく遠ざけることができる。かくしてわれわれはサンスクリットのçの価値が何であったかを精密には知らないが、それはインドヨーロッパ語の口蓋音のkの連続であるから、この所与は想像の範囲をはっきり限定してしまう。(p. 54)

「われわれはサンスクリットのçの価値が何であったかを精密には知らない」、すなわちそれはわれわれにとっての「出来事の未発」である。しかしそれは「前の時代」にはインドヨーロッパ語の口蓋音のkの連続で

あり、この「所与 la donnée」が「原像」である。そして「この所与は想像 supposition の範囲をはっきり限定してしまう」が、それは「この可能性が論理的な可能性である」からである。

3 パラグラフ：「初めの見解によるとしよう：いま或る規定された色の一瞥で現実的に再認のしるしを与えるなら、それが私念していた色であることをどうして知なのか。Nach der ersten Auffassung : Wenn ich nun beim Anblick einer bestimmten Farbe wirklich ein Wiedererkennungszzeichen von mir gebe, wie weiß ich, daß es die Farbe ist, die ich gemeint hatte?」この問いは『講義』のに次の一節に対応する。

＜講＞ 16世紀および17世紀のフランスの文法家たち、とくに外国人に教えようとした文法家たちは、興味ある注意書きをたくさん残してくれている。けれどもこの情報源たるや、はなはだ不確かである、というのもそれらの著者は何ら音声学的方法をもたなかったからである。彼らの記述は出まかせの用語をもってなされ、科学的厳密さを欠いていた。それゆえ彼らの証言もまた解釈される必要がある。(p.53)

「初めの見解」においては「予想が言い表わされている」のであった。いまは「興味ある注意書き」がそれである。けれども、「或る規定された音」の「記述」が「出まかせの用語をもってなされ、科学的厳密さを欠いている」以上、「彼ら（16世紀および17世紀のフランスの文法家たち）の証言」によって「現実的に再認のしるしを与えるなら、それが私念していた音であることをどうして知なのか」と問われよう。

4 パラグラフ：「しかし色の原像を如何なる形式においてもつことができるのか。In welcher Form aber kann ich denn das Urbild der Farbe in mir tragen? 私は例えば「いや、その色ではないがほぼ同じだ；私が私念している色はもっと暗い」と言う。Ich kann z.B. sagen “nein, die Farbe ist

es nicht, aber beinahe ; die Farbe, die ich meine, ist noch etwas dunkler”. 私は或る意味において自分の私念している色の位置を知っている, というのはこの位置そのものへの歩み寄りを私は認識しているから。Ich kenne in irgend einem Sinne den Platz der Farbe, die ich meine, denn ich erkenne eine Näherung an diesen Platz als solche.」これは『講義』の次の叙述を参考に読まれる。

〈講〉 もし出発点のほかに, なお同じ言語の同じ時代における類似音の並行的進化を知るときは, 類推によって推論し, 比例式を立てることができる。(p.54)

「出発点 le point de départ」だけであれば, 先の「サンスクリットの  $\zeta$ 」もそれをもっていた(インドヨーロッパ語の口蓋音の k)。ここではその「出発点のほかに outre」ということで, さらに「類推によって推論し, 比例式を立てる」ことができる——したがってここでも「予想が言い表わされている」。「いや, その色ではないがほぼ同じだ; 私が私念している色はもっと暗い」, これである。つまり「比例式」は「予想の基底 Basis」である——。いま「類似音の並行的進化」を  $A \rightarrow A'$ ・探究される音の「出発点」を B とすれば, 比例式は「 $A:A' = B:x$ 」であり, 求める音 B' が得られる。つまり比例式は「この位置そのものへの歩み寄り」であって, だから「私は或る意味において自分の私念している音の位置を知っている」のである。

5 パラグラフ: 「われわれの文法の諸命題はつねに物理学的命題風であって, 『第一次的』な・直接的なものに関わる諸命題風ではない。Die Sätze unserer Grammatik haben immer die Art physikalischer Sätze und nicht die 'primärer' und vom Unmittelbaren handelnder Sätze.」 「類推」は「文法的秩序のもの d'ordre grammatical」(p.230) である。そこで「われ

われの文法の諸命題」と謂われる。さて、先の「サンスクリットのç」に関して「ぞうさなく[直接に]d'émblée」という表現が使われたが、'd'émblée'は独語で'ohne weiters'である。これに対して、「(類推による)推論 raisonnement」は「出発点のほかに[以上に]outré」なされるのだから、ここでは「より広いweiter」視点が必要とされている。「われわれの文法の諸命題はつねに物理学的命題風であって、『第一次的』な・直接的なものに関わる諸命題風ではない」と説かれるゆえんである。

6パラグラフ：「否定的な命題は肯定的な命題と同じ限界を示し、ただ他のことを意味している。Der negative Satz zieht dieselbe Grenze wie der positive, deutet sie nur anders.」前パラグラフを承け、「否定的命題」——「われわれの文法の諸命題は『第一次的』な・直接的なものに関わる諸命題風ではない」——と「肯定的な命題」——「われわれの文法の諸命題はつねに物理学的命題風である」——である。「限界」については、『大論理学』初版が簡潔に説明している。

<大> 限界は或るもの自身に属している；或るものは限界の外に定在をもたない；限界は或るもの自身の即自存在であり、その自己内存在にとって外的ではなく、それ自身が自己内存在的な限界 insichseiende Grenze である。限界の真理態は規定態一般である。(Das Sein S. 79)

これも『講義』の次が参考になろう。

<講> 古代高地ドイツ語の或る時代に、waz3er, 3ehan, ezan と書かれてあり、wacer, cehan, etc. とは書かれていない。もし他方において、esan と essan, waser と wasser, etc. とあれば、この3はsにはなはだ近い音をもっていたが、同じ時代にcをもって表記されたものとはかなり違ったものであった、と結論されよう。(p. 55)

ここでは、「否定的な命題」:「wacer, cehan, etc. と書かれていない」, 「肯定的な命題」:「wa3er, 3ehan, e3an と書かれている」である。すると、一方「3は同じ時代にcをもって表記されたものとはかなり違ったものであった」と「ぞうさなく」結論される。他方「3はsにはなはだ近い音をもっていた」という結論は「類推による推論」である。ここでも「否定的な命題は肯定的な命題と同じ限界を示し、ただ他のことを意味している」対応する『大論理学』は次である (B 無 1 パラグラフ 第3文)。

<大> それ自身のうちに区別のないことである。Ununterschiedenheit in ihm selbst.

主語は「無・純粹無」だが、『考察』に即しては「否定的な命題」であった。その「否定的な命題は肯定的な命題と同じ限界を示す」のだから、「それ自身のうちに区別はない」。

## (12) 『哲学的考察』12節

はじめに『大論理学』だが (B 無 1 パラグラフ 第4文), 「無・純粹無」の「完全に空虚であること, 規定や内容の欠如していること」, したがって「それ自身のうちに区別のないこと」を承けて、「直観作用または思考作用」への言及である。

<大> —ここで直観作用または思考作用に言及することがゆるされるならば、その限りでは、何ものかが直観または思考されるかそれとも何ものも直観または思考されないかということは、一つの区別と認められる。Insofern Anschauen oder Denken hier erwähnt werden kann, so gilt es als ein Unterschied, ob etwas oder *nichts* angeschaut oder

gedacht wird.

『考察』 1パラグラフ：「①語の意味の素朴な見解は、語を聞いたり読んだりする際、人はその意味を『表象する』というものである。Eine naive Auffassung der Bedeutung eines Wortes ist es, daß man sich beim Hören oder Lesen des Wortes dessen Bedeutung 'vorstellt'. ②そしてこの表象する運動に対しても、語の意味する運動に対するのと同じ問いが現実的に妥当する。Und für dieses Vorstellen gilt auch wirklich die gleiche Frage wie für das Bedeuten eines Wortes. ③というのは、例えば人が空色を表象し、そして当の色の再認やその色を求めることがこの表象に基いているというのであれば、色の表象と現実に見られる色とは同一ではない、と言わざるをえなくなるだろうから Denn wenn man sich zum Beispiel die Farbe Himmelblau vorstellt, und das Wiedererkennen und Suchen der Farbe soll sich auf diese Vorstellung gründen, so muß man doch sagen, daß die Vorstellung von der Farbe nicht identisch ist mit der wirklich gesehenen Farbe ; ④そうすると比較は如何になされうるのだろうか。und wie kann nun ein Vergleich vor sich gehen?」 第1文・第2文より、「表象する運動」：「直観作用」, 「語の意味する運動」：「思考作用」の対応である。第3文・第4文に関わっては『講義』を参照する。

<講> ギリシャの文法家は、有声音 (b, d, g のような) を「中間」子音 (mésai) という用語をもって、無声音 (p, t, k のような) を psilái というそれをもって示した；後者をラテン人は tenuēs と訳している。  
(p. 53)

だがこれは「音に与えられた名称は、あまりにもしばしばあいまいな指標を供する」(同) ことの例である。『講義』訳者 (小林英夫) による注を



引いておこう。

彼ら [ギリシャの文法家] は音韻をひびき (sonorité) の度合いにしたがって母音 (phōnēnta, vocales) と子音 (súmphōna, consonantes) に分け、後者をさらに半母音 (hēmíphōna, semivocales : m n l r s sd ks ps) と黙音 (áphōna, mutae) に分け、この最後のものを次のように小分けした：有毛音 (daséai, aspiratae : ph th kh), 無毛音 (psílaí, tenues : p t k), 中間音 (mésai, mediae : b d g). tenuēs (単数 tenuis) の意味は「薄い、そのままの、単純な」。これらのラテン訳語は今日ひろく言語学で用いられている：tenuis (p), tenuis aspirata (ph), media (b), media aspirata (bh)。 (p.402)

「音の再認やその音を求めることが表象に基いている」なら「表象」は「指標」だが、それが「あいまいな指標 les indices ambigus」なのだから——例えば *tenuēs*。b 等が薄<sup>い</sup>音？——、「音の表象と現実に聞かれる音とは同一ではない、と言わざるをえない」——「現実に聞かれる b」は「薄<sup>い</sup>音」？——。

2 パラグラフ：「だがしかし、表象をする運動という素朴な理論はまったくの誤りであることはできない。Ganz falsch kann doch die naive Theorie des *Sich-eine-Vorstellung-Machens* nicht sein。」「まったくの誤りであることはできない」のは、「あいまいな指標」とは言い条、「表象をする運動」において「何ものかが直観または思考される」からである。

3 パラグラフ：「人は次のように言う：一つの語は命題の連関のなかでのみ意味をもつ、それが意味するところは、語は命題のなかでのみ語としての機能をもつ [ということである]、そしてこのことは、椅子は室内でだけその役割を果たす、と同様にほとんど何も言っていない [自分がほんのわずかなことを言うことしか許さない]。Wenn man sagt : Nur im Satz-zusammenhang hat ein Wort Bedeutung, so heißt das, daß ein Wort seine

Funktion als Wort nur im Satz hat, und das läßt sich ebensowenig sagen, wie, daß ein Sessel seine Aufgabe nur im Raum erfüllt. あるいはむしろよりよい例：歯車は他の歯車とのかみ合いにおいてのみその機能を發揮する，と同様に。Oder vielleicht besser : Wie ein Zahnrad nur im Eingriff in andere Zähne seine Funktion ausübt. 「椅子は室内でだけその役割を果たす」あるいは「歯車は他の歯車とのかみ合いにおいてのみその機能を發揮する」は「ほとんど何も言っていない」。そして「命題の連関のなかでのみ語は意味をもつ」ということも「同様にほとんど何も言っていない」——「何ものも直観または思考されない」——。しかし、その「何も言っていない」ということが「表象をする運動」に対しては「一つの区別と認められる」。

### (13) 『哲学的考察』13節

1 パラグラフ：「言語は、その諸命題に対応する行為の誘因となるポイント切替所の多様性でなければならない。Die Sprache muß von der Mannigfaltigkeit eines Stellwerks sein, das die Handlungen veranlaßt, die ihren Sätzen entsprechen.」 「誘因となるポイント切替所」とあるのは、『大論理学』の次の叙述を念頭に理解されよう (B 無 1 パラグラフ 第5文)。

<大> したがって、何ものをも直観または思考しないということは [何ものかを直観または思考することから区別された] 一つの意味をもっている Nichts Anschauen oder Denken hat also eine Bedeutung ;

ここでは「何ものをも直観または思考しないということ」が、「一つの意味」を誘引する「ポイント切替所」だからである。

2 パラグラフ・3 パラグラフ：「奇妙なことだが、言語を理解する運動の問題は意志の問題と関係がある。Merkwürdigerweise hat das Problem

des *Verstehens* der Sprache mit dem Problem des Willens zu tun. / 命令を遂行する前にその命令を理解することは、行為を遂行する前にその行為を意志することと親和性をもつ。Einen Befehl zu verstehen, noch ehe man ihn ausführt, hat eine Verwandtschaft damit, eine Handlung zu wollen, ehe man sie ausführt」 米国留学中の日本人高校生が「Freeze!」と命じられ、だが相手に近寄ったために射殺されるという事件があった。「Freeze!」を「Please.」と聞き間違えたのではないかとも言われたが、そうであれば「命令を遂行する前にその命令を（誤解することで）理解し」、そこで「(相手に近寄る) 行為を遂行する前にその行為を意志した」のである。つまり「行為を意志する運動」は「行為の誘因」である。

4 パラグラフ：「ポイント切替所ではハンドルによって多くの差異された物事が遂行されるように、ハンドルに対応する言語の諸語によってもまたそうである。Wie in einem Stellwerk mit Handgriffen die verschiedensten Dinge ausgeführt werden, so mit den Wörtern der Sprache, die Handgriffen entsprechen. 或るハンドルはクランク型であり、連続的に調整されうる Ein Handgriff ist der einer Kurbel und diese kann kontinuierlich verstellt werden ; 別のハンドルはスイッチに属し、立てられるか倒されるかしかできない einer gehört zu einem Schalter und kann nur entweder umgelegt oder aufgestellt werden ; 第三のものはスイッチに属しているが、これは三つ以上の位置を採りうる ein dritter gehört zu einem Schalter, der drei oder mehr Stellungen zuläßt ; 四番目はポンプのハンドルであり、上下動されてのみ働く、等 ; しかしすべてがハンドルであって、手で扱われる。ein vierter ist der Handgriff einer Pumpe und wirkt nur, wenn er auf- und abbewegt wird, etc. : aber alle sind Handgriffe, werden mit der Hand angefaßt.」 1 パラグラフより「ポイント切替所」は「言語 die Sprache ; le langage」であり、その「諸語によって多くの差異された物事が遂行される」。例えば「音韻変化」(gasti→geste)・「類推」(kranza→krenze)・「民

間語源説」(coute-pointe→corte-pointe)・「接着」(tous jours→tousjours)等である。そして「すべてが言語であって、口で扱われる」。

#### (14) 『哲学的考察』14節

はじめに『大論理学』を読む (B 無 1 パラグラフ 第6文)。

<大> 二つのことが区別されるのだから、われわれの直観作用または思考作用のうちに無がある (現実存在する) [ということになる] beide werden unterschieden, so ist (existiert) Nichts in unserem Anschauen oder Denken ;

「二つのこと」は「何ものかを直観または思考すること」と「何ものをも直観または思考しない」ことである。その「二つのことが区別される」すなわち「直観または思考」の「存在」と「無」だから、「われわれの直観作用または思考作用のうちに無がある (現実存在する)」。これは「接着 agglutination」について『講義』の説くところである。

<講> 接着はとりわけ、何ら意志的なものを、何ら能動的なものを呈しない；…… (中略) ……それはたんなる機械的過程であり、寄り合いはひとりでおこなわれる。これに反して、類推は分析を予想する手順であり、一つの知的活動、一つの意図である。(p.248)

「類推 analogie」が「一つの知的活動、一つの意図 une activité intelligente, une intention」であるのに対し、「接着」——詳しくは「狭義の接着」——は「たんなる機械的過程 un simple processus mécanique」であり「ひとりでおこなわれる se fait tout seul」。つまり「接着」は「何ものをも直観または思考しない」、あるいは「接着のうちに無がある (現実存在する)」。

そこで『考察』 1 パラグラフ：「一つの語は命題結合のなかでのみ意味をもつ：これは、棒はその使用において初めてレバーだ、と言うようなものだろう。Ein Wort hat nur im Satzverband Bedeutung : das ist, wie wenn man sagen würde, ein Stab ist erst im Gebrauch ein Hebel. その応用が棒をはじめてレバーにする。Erst die Anwendung macht ihn zum Hebel.」  
 ここでも「接着」に関する『講義』の叙述が参照されよう。

<講> 一個の合成観念が、意義単位のごく慣用的なつながりによって表現されるとき、精神はいわば近道をして、分析を斥け、その概念をまるごと記号群の上にあてがうと、これはそのとき単純単位となる；  
 (p. 247)

『考察』とのあいだに次の対応を認める。

「一つの語」：「意義単位」

「命題結合」：「つながり *une suite*」

「一つの語は命題結合のなかでのみ意味をもつ」：「一個の合成観念 *un concept composé* が、意義単位のごく慣用的なつながりによって表現される」

「使用」：「慣用 (的) *usage < usuel*」

「応用」：「近道 *le chemin de traverse*」

そして「精神」が「分析を斥け、その概念をまるごと記号群の上にあてがう」のであるから、「われわれの直観作用または思考作用のうちに無がある」と言えよう。

2 パラグラフ：「どの指図書も記述として扱われ、どの記述も指図書として扱われることができる。Jede Vorschrift kann als Beschreibung, jede Beschreibung als Vorschrift aufgefaßt werden.」 ふたたび「接着」に関する『講義』の叙述。

＜講＞ ふるい語群をますます単純語へと同化せしめうるような・  
 [狭義の接着以外の] 他のすべての変化：アクセントの合一化 (*vért-jús*  
 → *verjús*)、特殊の音韻変化、等。(p. 247)

「指図書」は「応用」のそれであり、例えば「棒をレバーにする」、すな  
 わち「変化」である。そして2パラグラフが「どの指図書も」と謂うのに  
 対応して、『講義』では「[狭義の接着以外の] 他のすべての変化 *tous les*  
*autres changements*」に言及される。

#### (15) 『哲学的考察』15節

はじめに『大論理学』(B無 1パラグラフ 第7文)である。

＜大＞ あるいはむしろ、無は空虚な直観作用および思考作用そのも  
 のであり、そして、純粹存在と同一の空虚な直観作用または思考作用で  
 ある。oder vielmehr ist es das leere Anschauen und Denken selbst und  
 dasselbe leere Anschauen oder Denken als das reine Sein.

前文「われわれの直観作用または思考作用のうちに無がある」に対して、  
 ここでは「無」が「空虚な直観作用および思考作用そのもの」だとされる。  
 その「無」が「純粹存在と同一」であるのは、それが「純粹無」として「純  
 粹存在」同様「抽象的無関心態 *die abstrakte Gleichgültigkeit*」だからで  
 ある。

『考察』1パラグラフ：「諸命題からなる体系の<sup>・</sup>一つの項として命題を理  
 解する、とは如何なる謂いか。Was heißt es, einen Satz als *ein* Glied eines  
 Systems von Sätzen zu verstehen? (次のように言うべきか：レバーの応  
 用がそうであるように、語の応用は瞬間になされるのではない。Es ist, als

sollte ich sagen : Die Anwendung eines Wortes geht nicht in einem Moment vor sich, sowenig wie die eines Hebels.)」 まず ( ) 内の叙述に関わって、『講義』の次を参照する。『大論理学』が「直観作用・思考作用のうちの無」から「空虚な直観作用および思考作用そのもの」としての「無」へ視点を移したように、『講義』の叙述も「接着」を離れて「類推」に関するものになる。次を再掲する。

〈講〉 [類推的] 創造が現われた瞬間にはじめて産出過程が生じると思うのは誤りである；その要素はとうに与えられている。私がいま *in-décor-able* のような語をこの場で作ったとすれば、それはすでに言語のなかに陰然と存在するのである；そのすべて要素は、*décor-er*, *décor-ation* ; *pardonn-able*, *mani-able* ; *in-connu*, *in-sensé*, etc. のような統合のなかに見出される；そしてその言のなかにおける実現は、それを形成する可能性に比べれば、取るにたらぬ事実である。(p.231)

「類推的創造」は「語の応用」の一だが、「語の応用は瞬間になされるのではない」のだから、「創造が現われた瞬間にはじめて産出過程が生じると思うのは誤りである」。そして *in-décor-able* が「すでに言語のなかに陰然と存在し」、すなわち「そのすべて要素が、*décor-er*, *décor-ation* ; *pardonn-able*, *mani-able* ; *in-connu*, *in-sensé*, etc. のような統合のなかに見出される」からには、「(*décor-er* 等の) 諸命題からなる体系の一つの項として命題 (*in-décor-able*) を理解する」ことが求められる。

2 パラグラフ：「例えば、レバーが四つの位置を採ることのできる変速装置を考えよう。Denken wir uns etwa ein Schaltwerk, dessen Hebel vier Stellungen annehmen kann. さてレバーはもちろんその位置を順に採ることができるのだから、それには時間を必要とする Nun kann er die freilich nur nacheinander annehmen, und das braucht Zeit ; 後に変速装置が

壊れて、一つの位置だけを採るようになったとしよう：それでもこれは四つの位置を採る変速装置だったのか。und angenommen, es käme nicht dazu, mehr als eine Stellung einzunehmen, weil das Schaltwerk danach zerstört würde : War es nicht dennoch ein Schaltwerk mit vier Stellungen? 四つの位置が可能ではなかったのか。Waren nicht die vier Stellungen möglich?」 「類推」に関しては次の事情がある。

＜講＞ 類推はむら気だ：*Kranz* : *Kränze*, etc.とあるかと思うと、*Tag* : *Täge*, *Salz* : *Salze*, etc.とある、これらは相当の理由で類推に逆らったものである。それゆえ、あるモデルの模倣がどこまで拡がるか、またそれを促すべく定められた型がどれであるかは、前もって言うことはできないのである。(p. 226)

*gasti*→*gesti*→*geste* の音韻変化を経てドイツ語の単数・複数の関係は *Gast* : *Gäste* だが、その *Gast* : *Gäste* からの類推で *kranz* : *kranza* は *kranz* : *krenze* (*Kränze*) の対立を示す。ところが「類推」の「むら気 caprice」のせいで、他方では「*Tag* : *Täge*, *Salz* : *Salze*, etc.とある」。これを、「*Tag* : *Täge* を採ることのできる類推」が「壊れて、*Kranz* : *Kränze* だけを採るようになった」と考えることができる。つまり「あるモデルの模倣がどこまで拡がるか、またそれを促すべく定められた型がどれであるか——すなわち「可能性」——は、前もっていうことはできないのである」。

3 パラグラフ：「このことが分かった人は、それが如何に複雑であるかも分かったであろう、そしてこの複雑さは、実際にはそうならなかったところの意図された使用によってのみ説明される。Wer es gesehen hätte, hätte gesehen, wie kompliziert es ist, und seine Komplikation erklärt sich nur durch den beabsichtigten Gebrauch, zu dem es tatsächlich nicht gekommen ist. そこで言語について私は次のように言いたい：何ゆえの



これらすべての試みか So möchte ich bei der Sprache sagen : Wozu alle diese Ansätze ; それらは使い道を見出す, そのときだけ意味をもつ. sie haben nur dann eine Bedeutung, wenn sie Verwendung finden.」 「実際にはそうならなかったところの意図された使用」について、『講義』に次の叙述が見出される。

＜講＞ 言語のなかに入るものは、一として言のなかで試みられなかったものはない；そして進化現象はすべてその根源を個人の区域にもつ。この原理は……(中略) ……かくべつ類推的改新に適用される。*honor* が *honōs* に取って替わりうる競争者となる前には、最初の話手がこれをその場で作り、他人がこれを模倣し、反復し、ついにこれを慣用せざるをえなくすることが、必要であった。／すべての類推的改新が、そのような幸運にありつくわけでは、なかなかない。おそらく言語の採り上げまい明日の日しらぬ結合には、ふんだんに出あう。児童語はそれで充ちみちている、なぜなら彼らは慣用をろくに知らず、まだそれに羽交い絞めされていないからである；彼らは *venir* を *viendre* といい、*mort* を *nouru* と言ったりする。(p.235)

‘*vendre*’ や ‘*nouru*’ は「実際にはそうならなかったところの意図された使用」である。「最初の話手（児童）がこれをその場で作り」はするものの、「他人がこれを模倣し、反復し、ついにこれを慣用せざるをえなくする」ということがなかつたからである。だがだからこそ——「実際にはそうならなかった」のだから——、「何ゆえのこれらすべての試みか」が問われ、「それらは使い道を見出す, そのときだけ意味をもつ」という答えが与えられる。ここで ‘*Ansatz*’ の訳語「試み」について一言する。英語訳・仏語訳は *disposition*’ で、邦訳（奥雅博）は「退化器官」である。けれども、第一に、この問いはその答えとセットになった「私」の自問自

答であり、つまり ‘Ansatz’ はその「使い道 Verwendung」——仏語訳 ‘utilisation’ ——が見出された「そのときだけ意味をもつ」、このことを説く。するとこの自問自答は、「言」における「試み *essai*」が「模倣 *imitation*」・「反復 *répétation*」・「慣用 *usage*」を経て「言語」に採り上げられるという、『講義』の叙述と変わらない。そして第二に、‘*einen Ansatz zu etw machen*’ = ‘*faire un essai de qc*’ というように、‘Ansatz’ に対応するフランス語の一つは ‘*essai*’ である。以上の理由により、本稿は ‘Ansatz’ を「試み」と訳した。

4 パラグラフ：「人は次のように言うことができる：命題の意義がその目的である。Man kann sagen : Der Sinn eines Satzes ist sein Zweck. (あるいは語について、『語の意味がその目的である』。Oder von einem Wort ‘its meaning is its purpose.’) 「言語」は「使い道を見出す、そのときだけ意味をもつ」のであるから、「命題の意義がその目的である」あるいは「語の意味がその目的である」。

5 パラグラフ：「しかし論理学は語の使用の自然史に関わることはできない。Die Logik kann aber nicht die Naturgeschichte des Gebrauchs eines Wortes angehen.」 「時間を必要とする」(2パラグラフ)とあったことを承けて「語の使用の自然史」と謂われるが、類推がどこまで及ぶか「前もって言うことができない *on ne peut pas dire d’avance*」こと・「試み」が「明日の日知らぬ結合 *les combinaisons sans lendemain*」でありうること等がそれに含まれる。例えば ‘*vendre*’ や ‘*nouru*’ は「実際にはそうならなかったところの意図された使用」として「空虚な直観作用または思考作用そのもの」だが、すると当然「論理学が語の使用の自然史に関わることはできない」だろう。

## (16) 『哲学的考察』16節

1 パラグラフ：「私が或る出来事を予想し、そして私の予想をかなえる

その出来事が生じたとき Wenn ich ein Ereignis erwarte, und es kommt dasjenige, welches meine Erwartung erfüllt ; それは現実的に私が予想していた出来事か、と問うことに意義があるか。hat es dann einen Sinn zu fragen, ob das wirklich das Ereignis ist, welches ich erwartet habe? すなわち、それ [それは現実的に私が予想していた出来事だ、ということ] を主張する命題は如何に検証されようか。D.h., wie würde ein Satz, der das behauptet, verifiziert werden? 私の知の唯一の源泉が、ここでは、自分の予想の表現と起きた出来事との比較である、ということは明らかである。Es ist klar, daß die *einzig*e Quelle meines Wissens hier der Vergleich des *Ausdrucks* meiner Erwartung mit dem eingetroffenen Ereignis ist。」それが「私の知の唯一の源泉」であるからには、「予想」の実現に関して私は「比較」以外に手段をもたない。関連して次の叙述を再掲する。

<講> 或る講演の席で、たびたび *Messieurs!* という語を連発するのを聞いた場合、そのつどそれは同じ表現であるとの感じをもちするものの、言い場所によって口調の違いや抑揚のために、はなはだしい音的差異が現われる——そのはなはだしさは、ほかの場合ならば別の語を区別させるほどである (参照, *pomme* と *paume*, *goutte* と *je goûte*, *fuir* と *fuir*, etc.) (p.151)

連発される *Messieurs!* を聞いて「それは同じ表現である」と感じるのは、「私が或る出来事を予想し、そして私の予想をかなえるその出来事が生じた」ことを比較によって確かめたからである。

2 パラグラフ: 「自分が『白』と呼ぶこの紙の色が昨日ここで見た色と同じだと、私は如何にして知るのか。Wie weiß ich, daß die Farbe dieses Papiers, die ich 'weiß' nenne, dieselbe ist wie die, die ich gestern hier gesehen habe? 私がそれを再認することによって Dadurch, daß ich sie wie-

dererkenne ;そしてこの再認する運動が、この知にとっての私の唯一の源泉である。und dieses Wiedererkennen ist meine einzige Quelle für dieses Wissen. そのとき『それは同じ色だ、ということ』は、私がそれを再認することを意味している。Dann *bedeutet* 'daß sie dieselbe ist', daß ich sie wiedererkenne. 「それは同じ色だ、ということ」すなわち「比較」は「再認する運動」である。講演の聞手も「それは同じ表現である」と「再認した」のである。

3 パラグラフ：「またそのとき、それらは本当に同じ色かとか、ひょっとして私は思い違いをしていないか、などと問うこともできない。Man kann dann auch nicht fragen, ob sie wohl die gleiche ist und ich mich nicht vielleicht täusche ; (それは同じ色であるか、もしかするとそう仮象しているだけではないか [と問うこともできない]。ob sie die gleiche ist und nicht etwa nur *scheint*.) 「比較」とは言っても「再認する運動」においては「本当に同じ色か」等と「問うことができない」。そして「問うことができない」のは疑問の余地がないからであり、つまり「その色はその色であって、その色でないものではない」のである—あるいは「その語 (*Messieurs!*) はその語 (*Messieurs!*) であって、その語 (*Messieurs!*) でないものではない」—。( ) 内の叙述が「存在 ist」や「仮象 *scheint*」を斥けるのは、それらが「本質」との区別を想起させるからである—つまり「純粹存在」(後出) ではないからである—。

4 パラグラフ：「もちろん、化学的検査が何の変化も示さないからその色は同じだ、と言うことも可能であろう。Es wäre freilich auch möglich zu sagen, die Farbe ist die gleiche, weil die chemische Untersuchung keine Änderung ergibt. それゆえそれらが私に同じ色に現われないときは、私は思い違いをしている。Wenn sie mir also nicht die gleiche erscheint, so täusche ich mich. しかしそのときでもやはり、何かが直接に再認されるはずである。Aber dann muß doch wieder etwas unmittelbar wiedererkannt

werden.」 「化学的検査が何の変化も示さないからその色は同じだ」、逆には「その色が同じでないなら化学的検査は何らかの変化を示す」。そして連発される *Messieurs!* を器械で観察すれば、そこには「はなはだしい音的差異が現われる」。「それゆえそれらが私に同じ語に現われるときは、私は思い違いをしている」、ひとまずはこう言えよう。「しかしそのときでもやはり、(フランス語話者によって) 同じ語が直接に再認されるはずである」。つまり “Tauschen ist Täuschen.” (交換とはだますことである。)

5 パラグラフ：「そして私が直接に再認しうる『色』と、化学的検査が確定する『色』とは二つの差異された物である。Und die ‘Farbe’, die ich unmittelbar wiedererkennen kann und die ich durch chemische Untersuchung feststelle, sind zwei verschiedene Dinge.」 *Messieurs!* の場合も同断であり、「ほかの場合ならばべつの語を区別させる」にしても、「私は *Messieurs!* を直接に再認しうる」。

6 パラグラフ：「同一の源泉からは一つのことだけが流れる。Aus derselben Quelle fließt nur Eines.」 「同一の源泉」は「唯一の源泉」なのだから、そこからは「一つのこと (*Messieurs!*) だけが流れる」。

対応する『大論理学』は「B 無」の最後の文 (1 パラグラフ 第 8 文) である。

<大> — 無はこうして [純粹存在と] 同一の規定である、というよりもむしろ同一の規定欠如態である、したがって一般に純粹存在があるところのものと同一のものである。Nichts ist somit dieselbe Bestimmung oder vielmehr Bestimmungslosigkeit und damit überhaupt dasselbe, was das reine Sein ist.

上に「その色はその色であって、その色でないものではない」ことを説いたが、「これらの命題はさしあたりは zunächst 空虚な同語反復の表現以

上のものではない」(I S.41 傍点川崎)。それゆえ「この思考法則は内容を欠いて ohne Inhalt いる」(同)。換言すれば「規定欠如態」であり、こうして「再認する運動」は「無」・「純粹存在があるところのもの」と同一のもの」である。

(未完)

注

(1)「集合(class)」とその要素である個々の「特殊者(particular)」とは、「区別されねばならず、「特殊者」が「存在する(there are)」のと同じ意味で、「集合」が「存在する(there are)」とは言えない。(渡辺二郎 p.194)